

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19402022

研究課題名（和文） フィリピンにおける慢性的貧困と社会ネットワーク

研究課題名（英文） Chronic Poverty and Social Networks in the Philippines

研究代表者

中西 徹（NAKANISHI TORU）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30227839

研究成果の概要（和文）：

本研究は、階層間流動化が慢性的貧困を緩和するという作業仮説について、貧困層が有する社会ネットワークの動態に着目し、マニラ首都圏とダバオ市の事例を検討した。その結果、マニラ首都圏の貧困層にあっては、主体的な活動を通して、階層間流動化を促進し得る余地が存在するのに対して、ダバオ市においては、現在までのところ、上位層からのアプローチのみが階層間流動化に貢献できる状況にあることがあきらかになった。

研究成果の概要（英文）：

We consider a basic hypothesis that liquidity among social strata contributes to reduction of chronic poverty by focusing attention on the social network the poor possess in Metro Manila and Davao City. Our conclusion is as follows: The poor in Metro Manila can promote such liquidity by utilizing their own social network while those in Davao City still find difficulties in such a process.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総計	6,700,000	2,010,000	8,710,000

研究分野：社会科学 A

科研費の分科・細目：応用経済学

キーワード：コミュニティ、慢性的貧困、社会ネットワーク、フィリピン、社会関係資本

1. 研究開始当初の背景

(1) 「慢性的貧困」(chronic poverty)は、社会制度などに起因して常に権原(entitlements)が剥奪されている状態(具体的には5年間にわたって貧困線以下の生活が恒常化している状態)と定義される多面的な貧困概念であるが、とくに社会的排除(social exclusion)をその源泉ととらえる「逆編入」(adverse incorporation)という議論が新しい(Hulume:2004)が、社会的排

除がどのようなメカニズムで常態化しているのかについてあきらかにされてこなかった。そこで、本研究はその間隙を親族・姻族関係をはじめとする社会ネットワークの考察によって埋め、階層間の分断にもとづく社会的排除の現象を明確にし、仲介者(broker)の出現によって、その分断が橋渡しされる可能性について再検討することを考えた。

(2) スコットは、行政による「画一化」(simplification)を軸とする開発政策は、

人々が有する「民衆知」(metis)を破壊し失敗すると主張した(Scott:1998)。しかし、その議論は民衆知を活用する新しい開発戦略についての言及には至っていない。本研究では、民衆知の源泉を人々間の社会ネットワークと捉え、そこに内在している智慧を活用する新たな開発政策を提示したいと考えた。

(3) 従来の社会関係資本(social capital)論(Coleman:1992, Putnam et al.:1993)は、基本的には共同利害のみに裏打ちされた社会集団というアメリカ型のコミュニティを想定しており、発展途上国では十分に育っていない「市民」間コミュニケーションや「市民」と「行政」のパートナーシップの活発化を強調している。したがって、これを取り入れた開発研究は、新しい組織や制度の導入を主張することになる。しかし、それはまさにスコットが「画一化」として批判した開発政策となる危険を有するものであろう。本研究では、スコットの議論にならい「社会関係資本」は内在しているものとして捉え、その重要な指標として社会ネットワークに着目したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フィリピンにおける階層固定的な社会構造(Hollnsteiner:1963)を、社会ネットワーク分析の立場から捉え直し、貧困をめぐる議論に新しい視点を提供することである。すなわち、フィリピンにおける富裕層、中間層、貧困層を対象として、長期の参与観察と質問票調査によって収集したデータを用い、固有のネットワーク構造を析出することによって、貧困層が有する民衆知をふまえた新しい開発研究の枠組みを構築したいと考えている。

既存の研究は、コミュニティを、基本的には、共同利害のみに裏打ちされた社会集団というアメリカ型のものとしてとらえ、発展途上国では十分に育っていない「市民」間コミュニケーションや「市民」と「行政」のパートナーシップの活発化を強調しているため、新しい組織や制度の導入を主張することになる。しかし、それはまさにスコットが「画一化」として批判した開発政策となる危険を有するものであろう。本研究では、スコットの議論にならい「社会関係資本」は内在しているものとして捉え、その重要な指標として社会ネットワークに着目する。

3. 研究の方法

(1)フィリピンの地域社会におけるネットワークの形成と深化を動的に把握する第1局面、(2)そのネットワークがどのようにして活用されているかを分析する第2局面、および(3)それらを総合し、二階層社会に

における社会的排除について再検討する第3局面という3つの部分からなる。

(1)第1局面においては、社会ネットワークの形成と深化を動的に把握するために、以下のような調査地のデータが主として収集された。(a)各調査地の社会集団を形成する各家族の属性データ(家計基本データ、移住経路、集団内住民組織役職など)、(b)各調査地の社会集団を対象とした、1)集団内外の親族・姻族関係、2)近隣関係、3)儀礼親族関係、4)聞き取り調査に基づく主体間の社会関係の変容についての質的データ。

この作業によって、調査地の集団内におけるネットワークがどのような経緯から形成、深化されてきたのかが、集団外部との関係も含めてあきらかになる。

(2)第2局面は、析出された人間関係が、集団構成員によってどのように活用されているかを明らかにする。様々な属性をもつ「情報」がネットワークの末端まで到達する過程を考察する。過去の情報の流通経路の遡及調査のみならず、定点観測から得た知見とインフォーマントの協力を得て、調査地への悪影響が及ぶことのないよう留意しつつ、様々な属性の情報をネットワーク上で実験的に流し、その流通経路と流通速度を測定する試みである。

第3局面は、異なる階層間の情報や社会関係の波及の可能性について、社会ネットワーク分析と参与観察によって、階層流動化の担い手としての仲介者(broker)を発見する。すなわち、調査対象のネットワーク上の孤立性をとおして社会的排除についての新しい知見を得ることのみならず、集団外部の異なる階層集団との間を橋渡しする仲介者を集団内部に発見することが可能である。

4. 研究成果

(1) マニラ首都圏における社会ネットワークの動態と社会流動性 社会ネットワークデータを用いた分析は、データの収集、解析および解析結果の解釈のそれぞれの段階で相応の時間がかかり、現段階では、完全に最終結果がでていないわけではない。しかし、マニラ首都圏のスラム地域については、集中的な調査によって、以下の結果を得た。

すなわち、①特定の主体が、異なるネットワークへの隘路を見出し、集団内部から仲介者(broker)となっていること、②それぞれの異なるネットワークへの仲介者は、ネットワーク毎に異なるものの、同一ネットワークの複数の仲介者には属性に共通性が見受けられること、③上位階層への仲介者を、有力大学への高等教育の機会付与によって創出することが可能であることの3点について、おおよその結論を得ることができた。特筆す

べき点は、フィリピン国立大学進学者が、卒業後、大学院生として研究者への道を歩みつつも、自発的に地区内の青少年のノン・フォーマル教育やコミュニティ活動に貢献し、同時に、上位階層との間の媒介としての仲介者の役割を強く認識していることである。それは、低所得層からの自立的な社会流動性の促進が可能であることを示していると解釈することができるであろう。

これらの事実発見は、政府にせよ、NGOにせよ、政策遂行にあたり、外部者の介入に頼らざるを得なかった既往の開発研究へのブレークスルーになり得るものであると我々は考える。

さらに、本研究の副産物として、同一社会階層の社会ネットワークが、二者間関係の連鎖を通じて、広い地理的範囲に浸透することが示されたことである。これは社会ネットワークの帯 (belts) というべきものであり、インタビュー調査によって、その階層における文化や慣習の同質性を確認することができた。それは、低所得層の薄く広いネットワークが新たな政治グループとして台頭し得る可能性を示唆していると考えられる。すなわち、①から③の研究結果を併せて考えるとき、大衆運動の起源の一形態を示すモデルと見なすことが可能かもしれない。

以上の議論は、バリー・ウェルマンの「コミュニティ解放論」、マーク・グラノヴェッターの「弱い紐帯論」、そして、ロナルド・バートの「社会的空隙論」などを前提とした、従来のコミュニティ論を、発展途上国の文脈の中で発展させ得るものであると我々は考える。

(2) ダバオにおける社会ネットワークの動態と社会的流動性 マニラ首都圏とは異なる社会的条件を有するダバオでは、あえて社会ネットワーク分析を主として用いることを回避し、富裕層・中間層と貧困層の流動性を活性化させる試みと最貧困層のバジャウ族のネットワークの深化について、事例分析を用いた検討を行った。

まず、階層間流動性を活性化させる試みについてである。たしかに、1986年以降の再民主化過程でも政治構想の違いにより階層間対立は解消していない。しかし、草の根レベルでは、異なる階層が協働してよりよき生活をめざす動きもみられる。その事例の一つとして、健康という普遍的価値の実現を求めて、階層横断的かつ水平的相互扶助組織を全国規模で展開してきた医療協同組合に注目した。ハーシュマンの離脱・発言・忠誠モデルを援用し、創設者である外科医の自伝を分析することを通じて、「国家の弱さ」を乗り越えようとする個人の行動が集団を巻き込んだときに生じる創造性と可能性、および

そうした実践が国家におよぼす影響を検証した。この検証によって、中間層以上の階層から社会的流動性を活性化させる試みが現実に存在することを明らかにした。

第二の視点は、少数民族バジャウの階層間を超えた社会ネットワークの可能性である。ダバオ市において、彼らは物乞いとして生計を立ててきたといわれているが、元来、海洋で生活の基盤を有していた彼らが上陸した後の社会関係の変容については、これまでほとんど調査がなかった。本研究において明らかになったことは、①ダバオ市の低地フィリピン人社会との接触によって集団内の階層化が進んだこと、②NGOや外国人などの外部との仲介によって、一見すると階層間流動性が促進される方向にベクトルが向いたように思われながら、それは実際の社会ネットワークにほとんど影響を及ぼしていないこと、③これらの非流動性の原因として、仲介者の主体的な関わり方などに問題が存在することである。

以上のように、前者の事例は、上位階層から階層間流動性を促進するための関わり方の成功例として、後者は、その失敗例としてみなすことができる。それは、階層間流動性を活性化させる外部からの関わり方の難しさと成功のための教訓を得ることができた点で重要な意義を有していると我々は考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 青山和佳(2008), 「開発援助を眺める: 経済学から人類学的実践への旅」『国際開発研究』第17巻第2号, 23~43頁, 査読付。
- ② 青山和佳(2009), 「開発援助の現場における解釈コミュニティの出現」『アジア研究』第55巻第4号, 55~75頁, 査読付。
- ③ 中西徹(2010), 「フィリピンの『市民社会』と『悪しきサマリア人』」『SGRA レポート』第52号, 33~41頁。

〔学会発表〕(計5件)

- ① Nakanishi, Toru (2007), "Universidad Externado de Colombia," Special Seminar: Community Development, 2007年9月27日, 招待講演, Universidad Externado de Colombia, Bogota, Columbia.
- ② Nakanishi, Toru (2008), "Community Dynamics: Community Deepening for the Urban Poor," UAP Special Seminar, 2008年8月20日, 招待講演, University of Asia and Pacific, Pasig City, Metro

- Manila, the Philippines.
- ③ Nakanishi, Toru (2009), "Migration, Poverty and Community Dynamics," 10th Shared Growth Seminar: Labor Migration and Poverty, 2009年5月7日, 招待講演, University of Asia and Pacific, Pasig City, Metro Manila, Philippines.
 - ④ Nakanishi, Toru (2010), "Community Dynamics and the Urban Poverty: Social Network Analysis," Shared Growth Seminar: Rural and Urban Poor Communities," 2010年12月18日, 招待講演, School of Labor and Industrial Relations, University of the Philippines, Quezon City, Metro Manila, Philippines.
 - ⑤ 青山和佳 (2010), 「流動性の高い社会における知の伝達と定着: 支援を見る眼」 (招待講演) 東南アジア学会, 2010年6月6日, 愛知大学.

[図書] (計5件)

- ① 中西徹 (2008), (山影進・高橋哲哉他と共著) 『人間の安全保障』 東京大学出版会, 288頁.
- ② 青山和佳 (2008), (佐藤仁他と共著) 『資源を見る眼: 現場からの分配論』 東信堂, 288頁.
- ③ 青山和佳 (2009), (下村恭民・小林誉明, ほかと共著) 『貧困問題とは何であるか』, 勁草書房, 296頁.
- ④ 中西徹 (2009), 春山成子, 野間晴雄, 藤巻正己, ほかと共著) 『東南アジア: 朝倉世界地理講座: 大地と人間の物語』朝倉書店, 451頁
- ⑤ 青山和佳 (2010), (受田宏之ほかと共著) 『開発援助がつくる社会生活——現場からのプロジェクト診断』 大学教育出版, 246頁.

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

研究代表者中西徹の2010年におけるフィリピン国立大学 (University of the Philippines) における招待講演④の論文は, フィリピン国立大学教授 Virginia A. Teodosio 博士を通じて, 大統領府貧困撲滅委員会に政策提言として提出された。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中西 徹 (NAKANISHI TORU)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 30227839

(2) 研究分担者

青山 和佳 (AOYAMA WAKA)
北海道大学・大学院・メディアコミュニケーション研究院・准教授
研究者番号: 90334218
(H19 研究分担者
H20-H22 連携研究者)